源氏物語湖月抄（本書底本）

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。同じ程、それより下﨟の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かし、恨を負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを、い

【訳】どなたの大御代であったか、女御や更衣が数多お仕え申上げなさった中に、大して高貴な身分ではない方で、抜群に、時に合って栄えていらっしゃる〔帝寵をうけている意〕方があった。（宮仕に上った抑々の）はじめから、「自分こそは（必ず御寵愛を得るだろう。」）と思ひ上っ（たことを考え）ていらっしゃる御方々〔女御方〕は、（この方を）意外なものとしてさげすみ、（且つ）うらやみにくみなさる。（この方と）同じ身分、（又は）それより低い身分の更衣たち〔以上によって、この方は下﨟でない更衣であることが判る。これを桐壺更衣という。以下更衣と呼ぶ。〕は、なお更心穏かでない。（こうして）朝夕の宮仕につけても、人〔他の女御更衣方たち〕の心を動揺させ、（その）恨みを身に受けたことが積り積ったせいであったであろうか、大層病身になっていって、何となく心細そうな様子で里〔実家〕（に引籠り）がちであるのを、（主上に於かせられては）層一層極めてふびんなものとお思いになって、（心の余裕もあらせられぬままに）人の譏をも気兼ねあそばすこともおできにならず、まさに世間の（溺愛